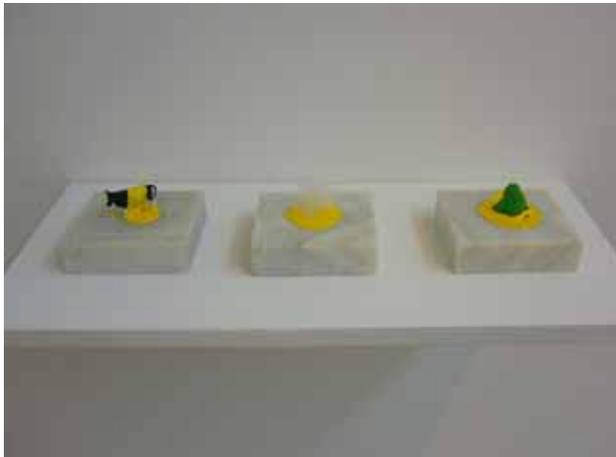
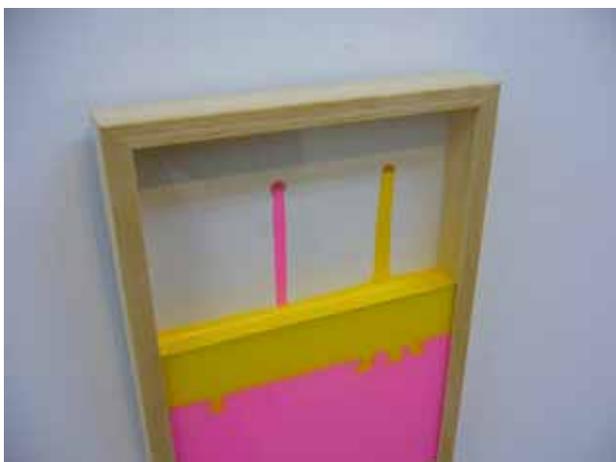


滝沢達史がペンキの美しさに身を委ねたとしても、それは物質社会に対する賛美や現代社会に対する反抗を示すことには決して成りえない。何故かと言うとペンキの美しさは滝沢にとって日常であり、または日常を生きていることから発見した些細な事項を何とか自らのものにし、作品として形成したいと言う努力の賜物であるからだ。



滝沢は簡素な額縁の中に、裏から穴を空けてペンキを流し込み、固める。ここに必要なのは厚さでも体積でもなく、視覚的な「感情」だ。感情とは喜怒哀楽では分類できないほどの壁の細かさを持つ。感情を込めれば感情的な作品が出来上がるわけではない。無機質な抽象に感情が存在するのが、滝沢作品の特徴の一つと言える。



滝沢はこの感情を、自らが持ち得る義歯、玩具、素材に垂らして固定する。この作品群も、単なる遊戯では収まらない。ここには時間や空間を瞬時に固定することが主眼となっていない。それよりもむしろ、神の視点からではなく人間の想像力や記憶概念と言った立場から、自由に、自在に時空を動かしているのではないだろうか。

そして滝沢は画廊の壁面に穴を穿ち、画廊内と画廊外の事務所を漏斗とパイプによって転結させ、ペンキを流して作品を生み出す。ここに表と裏、可視と不可視、現実と想像、此岸と彼岸といった対比を見出す必要性は生じない。無論、ピーピング・トムの発想も見当たらない。何故壁を隔たるのか。それは両面を同時に見る必要性が存在しないからだ。



我々はペンキと同様、メディウムであるのだ。自らが滝沢作品のペンキであると想像してみるといい。すると、壁の向こう側とこちら側を両方見ることが不可能であることが理解できるであろう。我々は神ではない。人間だ。



情感を保ちつつ、ペンキと言う自然を受け止めること。これからの滝沢の課題は、では何故受け止めざるを得ないのかという点にある。ペンキが腐食しないのであれば、その意味を解き明かさなければならない。他の素材や人間は腐食するのか、自然と腐食とは何か。そして我々の日常とは本当に現実の出来事であるのか。探究に終わりはない。